

生きる望みを失う中で

コリント人への手紙第二 1章 8-11節

はじめに

私が月の第二週に説教をする時は、「コリント人への手紙第二」からお話することにして
います。今日の聖書箇所には、パウロの証しのようなものが書かれています。パウロが苦難
を通して与えられた恵みを、コリント教会に分かち合っているのです。

1. アジアで起こった苦難

まず8節を見てみましょう。「**アジアで起こった私たちの苦難について、あなたがたに知らずに
いてほしくありません。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、生きる望みさえ失
うほどでした。**」

パウロは、アジアで苦難を経験したと言っています。しかもその苦難は、「非常に激しい、
耐えられないほどの圧迫」であって、「生きる望みさえ失うほど」であったと言います。9
節には、「**実際、私たちは死刑の宣告を受けた思いでした**」と言っていますが、これは「死を覚
悟した」という意味です。また10節には、「**それほどの大きな死の危険**」とありますから、パ
ウロがアジアで経験した苦難とは、死を覚悟するほどの苦難、生きる望みさえ失うほどの苦
難であったのです。

このパウロがアジアで経験した苦難とは、具体的にどのようなものであったのかは、はっ
きりと分かりません。ここでの「アジア」とは、おそらく「エペソ」の町のことだと思いま
すが、使徒19章を見ると、エペソの町で、銀細工人デメテリオスがパウロに対して、町中を
巻き込む大騒動を起こしたという出来事が書かれています。その時に起こった苦難であ
ったのかもしれませんが。またⅠコリント15:32でパウロは、「**エペソで獣と戦った**」と言
っていますので、その時の苦難であったのかもしれませんが。またパウロは、このⅡコリント11
章で、死に直面したことが度々あったと次のように言っています。「**ユダヤ人から四十に一つ
足りないむちを受けたことが五度、ローマ人にむちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、
難船したことが三度、一昼夜、海上を漂ったこともあります。何度も旅をし、川の難、盗賊の難、同
胞から受ける難、異邦人から受ける難、町での難、荒野での難、海上の難、偽兄弟による難にあい、
労し苦しみ、たびたび眠らずに過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さの中に裸でいたことも
ありました**」(Ⅱコリント11:24-27)。アジアでの苦難というのは、この中のどれかなのかもしれ
ません。

このようにパウロは、多くの苦難を経験し、何度も死に直面したことがあったようですが、
今日の聖書箇所にあるアジアでの苦難は特別であったようです。このアジアでの苦難につ

いては、コリント教会に「知らずにいてほしくない」「どうしても知ってほしい」とパウロは思ったほどでした。

2. 生きる望みを失う中で

なぜでしょうか。なぜパウロは、コリント教会にアジアでの苦難について、どうしても知ってほしいと思ったのでしょうか。それは、この苦難を通して学んだことがあったからです。9 節にはこうあります。「それは、私たちが自分自身に頼らず、死者をよみがえらせてくださる神に頼る者となるためだったのです」。パウロは、この苦難は、自分にとって神様からの訓練だったと捉えています。自分は、この苦難を通して、自分自身に頼らないで、神様に頼ることを学んだのだと言うのです。

パウロもやはり、私たちと同じ罪人であり、弱さを持つ人でした。ですから彼もまた、神様からの訓練を必要とする人であったのです。彼も私たちと同じように、神様に頼るよりも、自分自身に頼る人であったのです。彼もまた、神様からの訓練によって、特に死に直面しなければ、変えられない部分、砕かれない部分があったのです。

宗教改革者のカルヴァンは、この聖書箇所の註解でこのように言っています。「わたしたちが肉への信頼にふくれあがって、その思いが極度に執拗である時には、『自分の中にはもうどんな望みもありえないのだ』というほどのつきつめた考えかたでもしないかぎり、この思いを打ち倒すことはできない……。というも、肉はおごりたかぶるものであって、自分からすすんで身を低くすることをせず、抑えつけられるまではつべこべ言い張ることをやめようとしなからである。わたしたちもまた『神の力強い御手』(1ペテロ 5:6)によって打ち倒されるまでは、まことの謙遜に身をゆだねようとするのが決してない。…聖徒たちにおいてもさえも、この病毒の名ごりが幾分残っているということである。そのためにこそ、聖徒たちはしばしば、極限にまで身を低めているのである。それは、自分自身への信頼の思いをまったく取り去られ、謙遜になることを学ぶためであった。なおまた、この病毒は人間の心の中にこんなにも深く根をおろしているの、神が人間に死をあらわに見せたまわなにかぎり、もっとも完全な人たちでさえ、この病毒からすっかりきよめられることができない。…わたしたちは、自分自身への信頼がどんなにか神の御心にそむくことであるかを、はっきりと知らしめられる。この自己への信頼をため直されるためには、わたしたちは、死の判決を受けた者であるかのような状態にまで低められなければならないほどなのである」。

カルヴァンは、人間の心は、自分自身を信頼し、おごり高ぶる病におかされていると言います。そしてそのおごり高ぶりを砕き、私たち人間を謙遜にするために、神様はしばしば苦難を用いられると言うのです。そして時には、私たちを死に直面させ、私たちを訓練されると言うのです。それは、死に直面させなければ砕かれないほど、私たちの心、自分自身を信頼し、おごり高ぶる病は、頑なであるからです。

イエス様が語られた譬え話に登場してくる「放蕩息子」もそうでした。彼は自由を求めて、遠い国に旅立って行きました。しかし財産を使い果たし、飢饉に見舞われた時、彼は食べることに困り、飢え死にしそうになりました。その時に彼は、我に返って「自分は罪を犯し

た。父のもとに帰ろう」と思ったのです。彼もまた、飢え死にしそうになるまでは、自分の罪には気づけなかったのです。死に直面することで、彼は初めて我に返ったのです。

旧約聖書の伝道者の書 7：1-4 には、こうあります。「**名声は良い香油にまさり、死ぬ日は生まれる日にまさる。祝宴の家に行くよりは、喪中の家に行くほうがよい。そこには、すべての人の終わりがあり、生きている者がそれを心に留めるようになるからだ。悲しみは笑いにまさる。顔が曇ると心は良くなる。知恵のある者の心は喪中の家であり、愚かな者の心は楽しみのある家にある**」。伝道者は、死を思うことは知恵であると言います。私たちは、自分が死に直面する時、あるいは他人の死に直面する時、人生における大切な知恵を学ぶことができるのです。

パウロも、死の危険に直面し、生きる望みを失いました。その時に、自分自身が死に対して全く無力であることを知ったのです。死を前にして、自分自身は何もできないことを知ったのです。その時に彼は、イエス様を死者の中からよみがえらせた神様を思い出したのでしょう。イエス様は死に打ち勝ち、三日目によみがえられたこと、神様は死者の中からイエス様をよみがえらせたことを思い出したのでしょう。つまり、神様は死に打ち勝つことができる、死に対して力を持つ唯一の方であることを思い出したのでしょう。その時に彼は、自分は死に対して全く無力であり、弱くて脆い、信頼に値しない存在であることが分かったのでしょう。本当に信頼すべき方は、死を支配し、死に打ち勝つことができ、死者をよみがえらせる全知全能の唯一の神様しかいないということが分かったのでしょう。

私たち人間には、三つの生き方があると思います。一つは、自分自身に信頼して生きる生き方、二つ目は、他人に信頼して生きる生き方、三つ目は、神様に信頼して生きる生き方です。一つ目と二つ目は、いずれも人間に信頼して生きる生き方です。その意味では、私たち人間には、人間に信頼して生きるか、それとも神様に信頼して生きるかの二つしかないのかもしれないかもしれません。

科学技術が進歩した現代人は、神様を否定して、人間に信頼する生き方を選び取ります。確かに人間の科学技術は進歩しました。多くの高層ビルが立ち並び、インターネットを通じて、世界中の人と交流できるようになりました。また車や電車や飛行機で、世界中のどこにでも行けるようになりました。また宇宙にまで行けるようになりました。さらに医療も発展し、多くの病気が癒されるようになりました。しかしどんなに人間の科学技術が発展しても、いまだに人間は死の問題を解決することはできないのではないのでしょうか。どんなに医療が発展しても、死なない人間をつくり出すことはできません。また一度死んだ人をよみがえらせることもできません。またどんなに多くの企業を生み出し、財産を手に入れても、死なない体を手に入れることはできません。またどんなに有名になって、名声を手に入れても、死を逃れることはできません。

私たち人間は、どんなに科学技術が進歩しても、決して死に打ち勝つことはできないのです。死に対しては、全く無力なのです。しかし真の神であり、真の人であるイエス様は、死に打ち勝ち、死からよみがえられました。また全知全能の神様は、死を滅ぼし、イエス様を死からよみがえらせました。私たちは、この世の人生において、また永遠において、誰に信

頼って歩むことが確かな道なのでしょう。死に対して全く無力の自分自身なのか、それとも死者をよみがえらせる神様なのか、私たちはどちらか選ばなければなりません。

祝宴の時、楽しい時には、そのようなことは考えないかもしれません。しかし私たちは、必ず問われる時が来ます。私たちはいずれ必ず死を迎えるからです。私たちは、その時に考えればよいと思うかもしれません。しかしラテン語の「メメントモリ」「死を想え」という言葉があります。私たちは、死を見据えて生きる時に、有意義に生きることができるのだと思います。私たちは、この世の人生を、自分自身に頼って生きるか、それとも神様に頼って生きるのかをよく考えなければなりません。パウロは、コリント教会の人々が、自分自身に頼るのではなく、神様に頼って生きてほしいと願ったからこそ、アジアで経験した苦難について、どうしても知ってほしいと言ったのです。神様も、パウロが、自分自身に頼るのではなく、神様に頼って生きてほしいと願ったからこそ、パウロを苦難に遭わせたのです。神様は私たちにも、御自身を頼って生きてほしいと願っているのではないのでしょうか。

3. 祈りによる協力

10-11 節を見てみましょう。「**神は、それほどの死の危険から私たちを救い出してくださいました。これからも救い出してくださいます。私たちはこの神に希望を置いています。あなたがたも祈りによって協力してくれば、神は私たちを救い出してくださいます。そのようにして、多くの人たちの助けを通して私たちに与えられた恵みについて、多くの人たちが感謝をささげるようになるのです。**」

パウロは、死に直面した苦難から、神様によって救い出されたと言っています。具体的に、どのように救い出されたのかは分かりません。ただこの苦難が「エペソ」での苦難であるならば、パウロの同労者であるプリスカとアキラによって救い出された出来事かもしれないとある人は考えます。ローマ 16：3-4 には、こうあります。「**キリスト・イエスにある私の同労者、プリスカとアキラによろしく伝えてください。二人は、私のいのちを救うために自分のいのちを危険にさらしてくれました。彼らには、私だけでなく、異邦人のすべての教会も感謝しています。**」プリスカとアキラは、自分たちのいのちを危険にさらして、パウロのいのちを救ったとあります。神様は、プリスカとアキラの二人を通して、パウロを死に直面した苦難から救い出してくださいましたのかもしれませんが。

いずれにしてもパウロは、死に直面した苦難から救い出されたのです。その経験を通してパウロは、「これからも救い出してくださいます」という未来に対する確信を持つことができるようになったのです。ただ、これから神様は具体的にどのようにパウロを救い出してくださいするのか、それはコリント教会の「祈りの協力」によるのだと考えたのです。神様は、コリント教会を始め、多くのクリスチャンたちの祈りを通して、パウロを助け、救い出してくださいましたと考えたのです。ですからパウロはここで、祈りによって私に協力してください、祈りによって私を助けてくださいと、コリント教会に求めているのです。

神様は、私たちをあらゆる苦難から救い出してくださいする時、教会の、そして多くのクリスチャンたちの祈りを用いられるのです。誰かが病気になった、誰かが事故に遭った、誰かが

試練の中にある、ある人の救いを願っている、そういう時に、神様は、教会の、そして多くのクリスチャンたちの祈りを用いられるのです。神様は、祈りを通して、私たちに救い出されるのです。

祈りは、教会の交わりを造っていきます。11 節にあるように、多くの人が誰かのために祈る、そして祈りが答えられた恵みを皆で共有する、すると多くの人に感謝が生まれる、これこそパウロが求めていた教会の交わりです。教会は、誰かが苦難に遭ったならば、皆で祈ります。そしてその祈りが答えられた恵みを皆で分かち合います。そうすると、教会全体に感謝が生まれるのです。教会の交わりは、祈りによって造られていくのです。誰かのために皆で祈ることで、皆で今も生きている神様を、そして恵みを経験していくのです。

おわりに

教会は、この世にはない共同体です。教会に集まっている一人ひとり、無力かもしれません。しかし教会は、死者をよみがえらせる神様に信頼し、この神様に希望を置く人たちが集まっている共同体です。そして教会には、祈りがあります。私たちにあらゆる苦難から救い出してくださる神様に、祈ることができます。神様は、教会の祈りを通して、私たちにあらゆる苦難から救い出してくださるのです。教会が多くの祈りをささげ、祈りが答えられるという恵みを多く経験し、多くの感謝がささげられる時、この世にはない、本当の意味で強い共同体となっていくのではないのでしょうか。

パウロは、コリント教会に、祈りの協力を求めました。祈りを通して助けてくれるように求めました。私たちも恐れずに、教会に祈りの協力を求め、祈りの助けを求めていきましょう。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは、自分自身に頼り、おごり高ぶる性質に支配されています。私たちの心は、非常に頑なです。あなたの苦難、そして時には死に直面するような訓練を受けなければ、砕けないほど頑なです。どうか、私たちが信頼すべきなのは、自分自身なのか、それとも神様なのかを深く考えさせてください。

また私たちの教会が、本当の意味で強い共同体となっていくことができますように。私たち一人一人は、弱く無力ですが、全知全能の神様に祈り、皆で生きている神様を経験し、皆で神様の恵みを共有し、多くの感謝をささげられる教会となりますように。私たちも恐れず、教会に祈りの協力を、祈りの助けを求めていくことができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。